

學 報

Kobe College Bulletin

ISSN0389-164X

NO. 173

2015. 3. 11

神戸女学院

学報委員会

震災から20年

学 長 飯 謙

本年の1月17日(土)は阪神・淡路大震災の20年にあたる日でした。1995年のこの日、午前5時46分、淡路島を震源とする震度6超の地震が発生。別の活断層も動き、神戸女学院の周辺では震度7が観測されました。犠牲者は公的には6434人でしたが、それに数え入れられない関連死者が多くおられたことも忘れることはできません。ここに改めて犠牲となった皆様の上に平安をお祈りいたします。神戸女学院では、中高部は1月16日(金)、大学は19日(月)に震災を覚える礼拝を守り、祈りを合わせました。それを挟む期間、チャプレン室が講堂横の廊下に資料の展示をし、理解を助けてくださいました。

現在の中高部生はもちろんのこと、大学生の30%ほどにとっても生まれる前、他の70%のほとんどの人にも物心つく前の出来事です。教職員も20年前のことですから、岡田山での経験者は大学教員の約15%、中高部教員の約35%、職員の約30%、全体の約四分の一ほどです。当然のことながら、少しばかり距離のある話となりつつあります。そこで残された記録を読み直し、この悲しみの出来事について、何が起こったのか、何を乗り越えようとしたか、またこの学院に連なる人がどのような教訓を得、希望を共有したのか、再考の機会といたしたく存じます。

この震災により、神戸女学院では総額56億円という、年間予算を超える甚大な被害が出ました。倒壊建物が2棟、他に中高部三号館(現アンジー・クルー館)や旧宣教師住宅など使用不能となった建物が10棟。多くの人を見守った北寮は大きく折れ曲がり、文学館の屋根も損傷し、新聞やテレビで大きく報じられ、「神戸女学院壊滅」と思った卒業生も少な



くなかったと聞きます。揺れに耐えた建物も内部は手のつけようのない惨状でした。講堂2階のオルガンのパイプはすべて飛び出て1階に落下し、原形をとどめず、図書館も書棚が歪み、倒れ、書籍は散乱して山積みとなっているところもあり、足を踏み入れることもできません。大学と中高部が2月1日に予定していた入学試験は延期、現役学生への教育プログラムも講義や定期試験、卒業式まで、大幅な変更を余儀なくされました。

まことに辛い出来事でしたが、同時に多くの人の善意が届けられ、新たな希望の萌芽となりました。当日、キャンパス内の寄宿舎には、22名の中高生、155名の大学生がおりました。記録によれば、寄宿生は恐怖に怯え、悲鳴も聞こえたようですが、日頃の訓練の成果というべきか、短時間の内に全員無事にグラウンドに避難できました。チャプレンの茂洋先生や施設課の中井哲男氏らが地震発生から間もなく

駆けつけ、舎監の先生方と共に寄宿生を体育館からめぐみ会館に導き、食事と暖をとれるよう配慮くださいました。数日後には、荒れた屋内整理のために学生、卒業生、教職員が奉仕を申し出、力を尽くされました。校舎の扉は内開きです。書棚等のため入室不能となった研究室が多数ありましたが、これも現名誉教授の山本義和先生や内田樹先生、いまも現職の渡部充先生らのアクロパティックなご活躍により「解放」されました。余談としていえば、地震からしばらく無責任な噂が流布しました。本震以上の余震が三日目に、一週間目に、次の満月に（1月16日は満月）、一ヶ月目に到来する、と。ですから、ボランティアの皆さんにとっては、余震と建物倒壊の恐怖の中で、命がけの作業であったと申せます。わたし自身、主に文学館で片付けをしておりましたが、余震到来の地鳴りに身をすくませることが幾度ありました。他方、10日目に伝えられた現役生徒、学生、教職員全員無事（各ご家庭内の被害は厳しいものであったが）の確認は大きな喜びをもたらしました。そうして学内外、さらには海外からの貴い志。一つ一つの愛に立つ参与が、現場にいた関係者をどれほど励ましたことでしょうか。

では、このような緊急時に学院は何を大切にしようとしていたのか。当時の『学報』に書かれた城崎進院長（No.112）、原田恵子中高部長（No.113）、山内祥史学長（No.114）のお言葉から、それを窺うことができます。それはキリスト教主義、リベラルアーツ教育、国際理解の精神に立つ神戸女学院の教育理念であり、これを体現するキャンパスの環境であり、それをさらに活かすことでした。復興を、震災によって失われた平米数の数合わせ的な回復ということではなく、神戸女学院が神戸女学院であり続けることを前面に押し出す。わたしはこの度、その姿勢に再び巡り会い、胸を熱くし、敬意を覚えた次第です。振り返って、震災時のボランティアによる活動は、そのまま神戸女学院が「大切」にしようとしたことの復興に触れていたのだと思えます。

ひるがえって、わたしが学長に就任した2009年からの動きを考えますと、図らずもあの時の思いとの深いつながりが見出されます。この10年ほどで、大学を取り巻く社会の見方が急速に変化しました。当初の主要な柱は学士の質保証と情報公開でした。そ

れらが徐々に細分化され、各大学が自らの「個性」を明示するようにとの要請につながっていきます。ちょうど10年前、2005年には、その「個性」明示について中央教育審議会から7つの枠組みが提案され、個性を騙りながら階層化や均質化が進みかねない状況が生まれました。その後、2008年12月の「学士課程答申」で、入学者受け入れ方針・学位授与方針・教育課程編成や実施を明確化し、①教育課程の体系化、②教育方法の改善、③成績評価の厳格化、④教員の教育力向上、⑤学修成果の把握に取り組むよう提言がなされ、大学改革は新たな段階を迎えました。

これに対応して、神戸女学院大学でもミッションステートメント、アドミッションポリシー、アカデミックポリシー、ディプロマポリシー、キャリアデザインポリシー、さらに中期計画を立案、公表してまいりました。これらの要点については、『学報』本欄のNo.160（2011年3月）とNo.164（2012年7月）で報告させていただきました。大学では、この策定にあたって数次の教員研修会を開催し、創立者の思想や現行カリキュラム導入の経緯など、神戸女学院が辿った道をていねいにさらい、新たな時代への備えを行いました。学外からの要請に対応してではありませんが、わたしは、神戸女学院大学が、震災に際して先達が懐いた思いをも21世紀の文脈で言葉化したことに大きな意義があったと感じています。その中から英語教育の再構築やリベラルアーツ&サイエンス・プログラムなどの新課程がスタートしました。また溝口薫副学長を中心に組織された「2018年度問題ワーキンググループ」はその理念をさらに活かし、深める環境整備を検討してくださっています。これらには、神戸女学院の建学の精神をいっそう具現化するようにとの祈りが込められています。これからもそのために力を注いでまいります。

わたしの学長任期は、今月末に満了いたします。神戸女学院が教育理念を再確認する時期にこの職につき、その業に関われたことを、まことに幸いであつたと感謝いたしております。忍耐をもってお支えくださいました皆様に、心より御礼申し上げます。4月からは齊藤言子新学長を応援し、引き続き学生の皆さんへの奉仕につとめてまいります。

クリスマス報告

〈中上部 クリスマス燭火賛美礼拝〉

12月17日(水)、講堂にて中上部のクリスマス燭火賛美礼拝を守りました。

礼拝前、照明を落とした講堂の壁には救い主の降誕の場面が映し出され、荘厳な前奏曲の響きとキャンドルの光が厳かであたたかな雰囲気をつくりだしていました。

招きの言葉としてヨハネによる福音書3章16節の御言葉が語られ礼拝が始まりました。S3音楽選択者によるハンドベルの清らかな演奏に続いて、JSコーラス部とS2音楽選択者がローソクを手に、讃美歌「ひさしく待ちにし」を歌いながら入堂してくると、講堂全体が聖堂にいるかのような雰囲気に包まれました。

聖書の朗読と賛美を交互に捧げながら、クリスマスの出来事を振り返り、その意味を確かめる時を守りました。この日は尼崎教会の廣田和浩牧師により「イエスは道・真理・命」という題で説教をしていただきました。廣田牧師はノーベル平和賞を受賞されたマララ・ユスフザイさんの働きについて触れながら、この世界の希望についてお話してくださいました。道であり、真理であり、命であるキリストの生涯を学ぶことで人は闇を経験したとしても希望を携えて生きることができるのだということなのだと思います。また、神戸女学院で聖書に親しみ、礼拝を守ることの意義についても改めて教えてくださり、美しい講堂で、大切な仲間と共に毎朝の礼拝を守ることのできる幸いを思いました。

礼拝の中で講堂の中央に3本のローソクの火が点され、私たちの心に点された希望の光について考える時が与えられました。この火がキリストの教えられた信仰、希望、愛の象徴であること、また、廣田牧師の説教にもあった道、真理、命の象徴であることが献金感謝の祈祷の中で触れられ、クリスマスに点された灯の貴さを感じました。この礼拝を通して、それぞれの心には灯が点されたことと思います。その灯を隣人のために掲げて歩む者でありたいと思います。また、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」というクリスマスのメッセージにふさわしく応答する者でありたいと思います。

すばらしい礼拝のためにご奉仕くださいましたすべての皆様へ心から感謝いたします。

(JS宗教部)

〈大学〉

世界中の多くの人々が待ち望むクリスマスの時期をむかえました。例年と同じくクリスマス前の一週間は各学科の担当によってチャペルアワーをまもらしました。演奏や合唱、心温まるクリスマスのエピソードをうかがうなど、神戸女学院らしいチャペルアワーでした。

クリスマス礼拝当日となる12月19日の金曜日は、授業の時間割を変更し、正午から大学クリスマス礼拝をまもらしました。夜に行われる学院公開クリスマス礼拝と同じく、音楽学部による演奏・合唱奉仕の中での讃美礼拝は、主イエスの誕生を祝い、敬虔な気持ちを思い起こします。今年は長年本学でキリスト教学講師としてお働きいただきました松木真一先生に「心安らぐ時、心あたたまる時」と題してメッセージをいただきました。震災の年のクリスマスに、被災した学生と共に語りあった「キリストが生まれる場所とはどういう場所なのか」ということから、まだ震災の瓦礫や多くの悲しみに心を痛める学生達にとってイエスが馬小屋で生まれたことは、深い慰めになったこととお話くださりました。

終了後には、出口においてささやかなチョコレートのプレゼントが、院長先生や学長先生、宗教活動委員の先生方、学生ボランティアによって、会衆に配られました。これを皆で共にいただき、主イエス降誕の喜びを分かち合いました。

また、学生ボランティアには今年もクリスマス礼拝での舞台照明、受付のスタッフとして奉仕をしていただきました。

昨年に引き続き、会場のほのかな灯りの中、暗闇の中に灯る壇上の蠟燭の光に、キリストの生涯と福音を感じる大切なひと時となりました。



〈神戸女学院 公開クリスマス礼拝〉

学院全体でまもられる公開クリスマス礼拝は、今年で42年目をむかえました。

今年も、例年のようにオルガニストの片桐聖子氏による心引き締まる前奏から始まり、高等学部生徒によるハンドベル演奏、招詞、一同による讃美。会場の電気が消され、壇上の蠟燭の灯りだけがゆらめく中、音楽学部による演奏が会場に鳴り響きます。聖書が読まれ、中高部コーラス部による合唱。今年度でお辞めになられる松田央チャプレンから「イエス・キリストを受け入れる喜び」と題してメッセージをいただきました。

再び音楽学部の演奏。音楽学部の中村健先生、昨年に引き続き音楽学部の Xavier Luck 先生に指揮をしていただき、オーケストラの演奏に、しばし日常を離れ、音楽に心をゆだねるひと時が与えられました。そして一同で高らかにクリスマスの讃美歌を歌い上げ、最後に祝祷をもってクリスマス礼拝は終わりました。

毎年、少しずつ舞台に変化を加えています。今年は大学聖歌隊の配置を少し前に出し、また学生のソリストは指揮者の横で歌っていただきました。いつもより大きな合唱に驚かれた人もいらっしゃいました。

学院全体が大切にまもっているこのクリスマス礼拝は、神戸女学院がキリスト教主義学校であることを強く伝えられる大きな機会であるとともに、学院として共にひとつの祈りのときを持つことができる意義ある場です。来場者数も630人と、会場が満員になります。皆様がこのひと時を変わりなくおおぼえ下さることを42年目の節目として改めて心に刻み、心より感謝申し上げます。

次年度以降も主の恵みに共に与かるひと時を、神戸女学院に連なる者として、一緒に過ごしていただけるよう祈るものです。

司式：中野 敬一 奨励：松田 央
指揮・編曲：中村 健 指揮：Xavier Luck
合唱・管弦楽：神戸女学院大学音楽学部
ハンドベル・中高部コーラス指揮：喜多 牧子
奏楽：片桐 聖子

〈プレゼント・献金報告〉

★施設へのプレゼント

今年も大阪水上隣保館（大阪府三島郡）と神戸真生塾（神戸市中央区）へプレゼントをお届けすることができました。神戸真生塾には、J家庭科研究部による手作りの小物とS料理研究部が焼いた名前の入ったクッキーを合わせてプレゼントしております。

昨年に引き続き、東日本大震災をおぼえて、福島にある社会福祉法人 牧人会（福島県西白河郡）の白河めぐみ学園と白河こひつじ学園です。

個人情報保護の問題もあり、続けていくことがなかなか困難な行事となってきましたが、誰かがあなたの事を思い、支えたいと思いを寄せているその気持ちだけでも施設の皆様にお伝えできるよう、これからは行っていきたいと思います。今年は神戸真生塾には中高部自治会の方々、福島の2施設には中野チャプレン、大阪水上隣保館には松田チャプレンが、サンタクロースの代表としてプレゼントを運びました。合わせて報告させていただきます。

個人情報保護のため、
一部削除しています。

みなさま、ありがとうございました。

（チャプレン室）

KCCだより

[Kobe College Corporation (KCC) was established in 1920 in Chicago, Illinois, as a non-profit organization by a group of Christian philanthropists. Its original purpose was to provide financial support for the relocation of the Kobe College campus from Kobe to Nishinomiya. Ever since, KCC has been a strong supporter of the school, both materially and spiritually, creating opportunities for cross-cultural educational experiences for students and teachers. In 2004, the organization added "Japan Education Exchange" to its original name as its activities expanded beyond support for the school. Kobe College has benefited greatly from the generous support of KCC-JEE for many years.]

Visit to Kobe College, September 2014

KCC-JEE, VP for Programs
Roberta Wollons

In September I was invited to Kyoto from the 18-27 for a conference and symposium at Kyoto University. I was working with graduate students in the department of Contemporary Civilizations and presented a paper at a symposium, "Global Social and Cultural Encounters: Why Culture Matters."

Before the conference, on September 22, I had a wonderful day visiting Kobe College where I saw the campus after a long time away, and met up with old friends. I had forgotten about the long hot walk from the train station and up the hill!

I arrived at 1:30 in the afternoon and went directly to the Chancellor' Meeting room where I greeted Yuriko Kurose-Takenaka, my dear friend from my days teaching



竹中(黒瀬)百合子さんとボストンにて (2014年・秋)

at Doshisha University. Her husband, Masao Takenaka, was in the Divinity School and the American Studies department when I first started teaching there in 1991. He wrote a biography of Charlotte DeForest. Yuriko-san is a wonderful photographer and whose photographs are used in the gorgeous annual Kobe College calendar.

Then I had an informal meeting with KC Chancellor Dr. Mori, President Dr. Ii, and Prof. Mizoguchii, who is the College Vice President, and Prof. Kobayashi, the Chair of the Department of Psychological and Behavioral



森院長

Sciences and the next department for the Drake Professorship. We had a good talk about the programs that KCC-JEE and KC share.

Afterwards, I visited with another old friend, Prof. Emeritus Masahiro Hamashita. Professor Hamashita is a professor of aesthetics, especially the traditions of Japanese and East-Asian aesthetics. We talked until time ran out about his work even in retirement and our mutual interests. He is still



林中高部長

deeply engaged in the work of cross cultural understanding.

At 5:00, Prof. Mariko Hayashi, Principal of Kobe College Junior and Senior High School, picked me up for a tour of the High School, especially the new wing. It's

a wonderful building that offers so many opportunities for students. Their creative work was evident all through the hallways and on the walls.

After our tour, Hayashi-sensei took me to dinner with the Gottschalk teachers. They are the most enthusiastic and energetic group of teachers! They clearly love the students and the work they are doing to uphold the KC's national reputation for excellence in English language instruction. We went to a lovely Chinese restaurant and talked and ate for hours! I was so glad to have the chance to get to know them and hear their enthusiasm for the students and the campus.



グローヴァー准教授

Finally, I was hoping to also meet up with Prof. Velma Grover, who was just finishing up her year as the Drake Professor. She couldn't join us for dinner, so I met her after dinner for a

short visit at the train station. Prof. Grover joined the Faculty of Human Sciences in October 2013. She is a specialist in water management and environmental sustainability, with fifteen years of work experience in international development with United Nations University, UNESCO, the Economic Research Forum, the government of Egypt, and various additional non-governmental organizations. She had a great deal of experience to bring to her students.

We had a good visit and Velma shared how much she had enjoyed teaching at Kobe College and working with the students. She will miss Japan as she heads back home to Canada.

With that, my very busy day at Kobe College came to an end. I was so happy to visit with old friends, see the changes on the KC campus, and have a chance to meet our Gottschalk teachers and Drake professor. It was a wonderful day and made me feel re-connected with the campus and the importance of the KC - KCC-JEE relationship. Thanks to Atsuko Ide and Shoko Hasegawa, Chancellor's Office.

Special thanks to Dr. Mori who took time from his busy schedule to visit with me, and who gave up his conference room for many hours of the afternoon!

[コーベ・カレッジ・コーポレーション (KCC) は、1920年に神戸女学院のキャンパス移転の資金援助のために設立された、アメリカ合衆国イリノイ州を本拠地とする非営利団体 (NPO) です。以来、日米両国の学生生徒ならびに教員のために、さまざまな文化交流の機会を創出するなど、有形無形の力強い支援を行い、神戸女学院はその活動によって大きな恩恵を受けてきました。2004年、KCCはその活動範囲を拡大するために、名前の後に“Japan Education Exchange”という副称を付け加えて、通称KCC-JEEとなりました。今回執筆してくださったのは、1997年の理事就任以来活動を継続してくださっている、プログラム担当副会長のロベルタ・ウォロンズさん (Dr. Roberta Wollons) です。]

「2014年9月の神戸女学院訪問」

KCC-JEE 理事、プログラム担当副会長
ロベルタ・ウォロンズ

私は、京都大学で昨年9月18日から27日まで開催された、会議とシンポジウムに招かれました。私は現代文化学系の大学院生たちと共同で研究を進めていましたので、「グローバルな社会と文化の遭遇：文化が重要である理由」というシンポジウムで論文発表を行いました。

会議に先立つ9月22日、私は神戸女学院を訪問し、本当に久しぶりにキャンパスを見ることができましたし、古い友人たちとも旧交を温め、素晴らしい1日を過ごしました。駅から学院までの道のりのこと、すっかり忘れてしまっていたのですが、坂道を登るのは暑かったし大変でした。

午後1時30分に総務館の院長副室に到着すると、同志社大学で教えていた頃からの親友、竹中(黒瀬)百合子さんが待っていてくれました。私が同志社大学で教鞭を執り始めた1991年、彼女のご夫君である竹中正夫先生は神学部とアメリカ研究所の教授でした。彼は神戸女学院の第5代院長シャーロット・デ

フォレスト先生の伝記の執筆者です。百合子さんは優れた写真家で、その写真の数々は神戸女学院が毎年発行している素敵なカレンダーに登場しています。

それから、森院長、飯学長、溝口副学長兼教務部長、そして次のブライアント・ドレーク客員教員派遣プログラムの受入学科である人間科学部心理・行動科学科の小林学長と非公式の会合を持ちました。KCC-JEE と神戸女学院が協同している数々のプログラムについて実りのある意見交換を行うことができました。



濱下名誉教授

そこへ、畏友の濱下昌宏名誉教授が訪ねて来てくれました。濱下先生は美学、主に日本の伝統や東アジアの美学が専門です。彼が退職後も続けている仕事の話、お互いの関心事などなど、時間が尽きるまで話し続けました。彼は今も異文化理解のための仕事に深く関わっているようでした。

午後5時、中高部長の林真理子先生が迎えに来てくれました。先生に新しくできたばかりの新館（ヴァージニア・クラークソン記念館）を含めて中高部を案内してもらいました。新館は、生徒たちにたくさんの機会を与えることができる素晴らしい建物でした。廊下や壁に並べられた生徒たちの創造的な作品がその証です。（ちょうど文化祭の翌週でしたので、生徒たちが文化祭のために頑張った成果のあれこれをご覧いただくことができました。）

見学ツアーのあと、林先生は私をガチョック・ティーチャーズ（中高部英語教員）のみなさんと一緒に夕食会に招いてくれました。彼女たちは本当に熱心で積極的な教師です。生徒たちを心から愛し、英語教育における神戸女学院の全国的な名声を支えています。私たちは素敵な中華料理店で、語りかつ食べて、気が付いたら何時間も経過していました。彼女たちと知り合い、生徒やキャンパスへの熱い思いを聞く機会を持てたことをとても嬉しく思います。

最後に、私はちょうどブライアント・ドレーク派遣教員としての任期を終えようとしていたヴェルマ・グローヴァー准教授と会いたいと思っていました。彼女は夕食会に参加することができなかったの

で、食後のほんの短い間、駅で会うことにしました。グローヴァー准教授は人間科学部で2013年10月から半年の予定で教えていました。水資源管理や環境持続可能性の専門家で、これまで15年にわたって国連大学やユネスコ、経済研究フォーラム、エジプト政府、その他にもたくさんの非政府組織の活動に関わって来ました。彼女の多岐にわたる経験が学生たちにもたらしたものは大きかったと思います。私たちはよい出会いをし、ヴェルマは神戸女学院で教えること、学生たちとの研究がどれほど楽しかったかを語ってくれました。彼女は日本を去ってもうすぐカナダへ帰ることを寂しがっていました。

このようにして、私の神戸女学院でのとても慌ただしい一日が終わりました。友人たちと再会し、キャンパスの移り変わりを見、KCC-JEE が派遣している中高部英語教員やドレーク客員教員たちとも会うことができました。素晴らしい一日は、私とキャンパスとの絆を回復させ、神戸女学院とKCC-JEE との関係の重要性を教えてくれました。院長室の井出さん、長谷川さんありがとう。私のために忙しい時間を割いてくださり、また、午後の半日、院長副室を私のために提供してくださった森先生に心から御礼を申し上げます。

2015年度年間標語

愛する者たち、互いに愛し合いましょ
う。愛は神からであるもので、愛する
者は皆、神から生まれ、神を知ってい
るからです。 (ヨハネ I 4:7)

学院チャプレン 飯 謙

この言葉は「愛神愛隣」を言い換えたフレーズとして、神戸女学院のチャペルでもしばしば読まれ、愛唱されています。けれども「互いに愛し合う」は決して簡単なことではありません。それどころか、「きれいごと」ですまさかかねない考え方です。たとえば、世界で深まりつつある争いに目を向けるとき、その思いはいつそう深まります。憎しみの連鎖はとめようもなく広がっており、わたしたち自身も、その渦の中に巻き込まれそうです。他方、イエスは「敵を愛せ」(マタイ 5:44)とまで言うのですから、単なるスローガンで退けてはならない重さも認められます。少し背景に目を向けましょう。

「ヨハネの手紙」は紀元1世紀末、いわゆるグノーシス主義と論争をしていたグループの文書です。グノーシス主義は、真摯に信仰を求めた人々の集団でしたが、結果として(平板化していえば)信仰を単なる精神論に押し込めてしまいました。それを批判する「ヨハネの手紙」の著者には、自身を安全な場所に置いて、ただ心の覚醒や安定追求に終始する、現実への当事者意識を欠いた運動、と映りました。聖書の信仰の本質は、それとは反対に、自己犠牲を厭わず、隣人との喜びに生きる姿勢に見出されると考えたからです。それが「愛」と訳されるギリシア語アガペーの基本的な在り方でした。

著者らはその根拠に、「神を知っている」ことをあげます。それはどのような「神」でしょうか。文脈を読み進むと、「わたしたち」を愛された神(10-11節)に行き当たります。神は、自分だけ、仲間だけ、一定の悟りを開いた者だけを愛するのではない、「わたしたち」すべてを愛する方である、それが憎しみの連鎖に距離を置く「知」にもつながる、と。ここに、本学院に連なる人すべてが身につけたい「信」と「知」が示されています。

退職のことば

個人情報保護のため、
8ページ目右段から
13ページ目左段は
削除しています。

人 事

個人情報保護のため、
一部削除しています。

慶 弔

史料室の窓(36)

高等教育130年

— 1885年のカリキュラム —

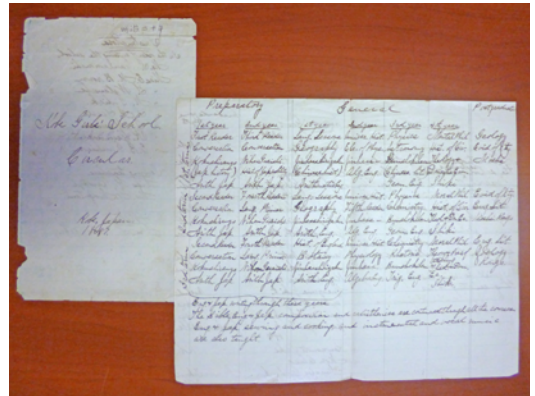
神戸女学院史料室 佐伯 裕加恵

神戸女学院は2015年に創立140周年を迎えます。神戸の山の手、雑居地と呼ばれていた地で、女子のための寄宿学校として産声をあげた女学校は、2代目校長の時からキリスト教主義学校として、その地歩を着々と固めてきました。カレッジを卒業してすぐに宣教師の任命を受けたエミリー・マリア・ブラウン先生 (Miss Emily Maria Brown) は大きな目標を胸に抱いて来日しました。1883年から第3代校長として学校のかじ取りを任された先生は、続いて来日したスーザン・アンネット・ソール先生 (Miss Susan Annette Searle) と共に改革を実行していきます。

先生方の目標はカレッジ教育でした。カレッジ教育とはアメリカのマウントホリヨーク・カレッジ (Mount Holyoke College) に代表されるリベラルアーツ女子高等教育のことを指します。ブラウン先生は言います。「師範学校よりもむしろウエルズレーをこの学校のモデルとすべきなのです。」(ブラウン書簡1885年7月6日) と。

そして誕生したのが1885年に設置された1年制の高等科です。これが神戸女学院における高等教育課程のスタートになります。ソール先生によれば、「3人以上の1学級の希望があれば高等科を1年設けます。この勉強はこれを履修した者にとりまして、他の教育課程のいずれの1年よりも価値あるものと見えました。」(ソール書簡1887年12月17日)

1885年のカリキュラム表は、残念ながら残っていません。しかしソール先生が「価値あるもの」と言っている時点での学校便覧があり、当時のカリキュラムを知ることができます。しかもソール先生の手書きのものです(この学校便覧は1992年発行の史料室機関紙『学院史料』第10号に活字化したものを掲載しています)。便覧では高等科は“The post-graduate course is inserted for the benefit of those who wish to continue their studies after completing the regular course.”と紹介されていて、カリキュラム表によると、1学期には Geology, Evid. of Xty, Moshi, 2学期は Evid. of Xty, Eng. Lit., Moshi, Rongo, 3学期は Eng. Lit., Zoology, Rongo を履修するとあります。ソール先生が詳しい内容を語っています。



1887年のカリキュラム

「高等科の1年間の勉強は、これを履修した人々にとって大変役に立っていることが立証されました。こちらの英語科は、英文学及びキリスト教の証明(ホブキンス)各2学期間と、地質学(ダナの地質学物語小説)及び動物学1学期間とから成っております。〔略〕学生たちは全過程を通して週に2時間から4時間、和漢の授業を受けております。〔略〕卒業前には皆、毎日半時間聖書の勉強をいたします。」そして「わたくし共は、わたくし共の教育課程は本国における立派な高等学校の課程にほぼ匹敵するものとみなしております。」と述べ、「わたくし共は、最も高度な学業を欲している少女たちを擁してゆくに足る高度な教育課程を持ちたいものと、切に願っております。〔略〕わたくし共は、この授業〔オルネイの大学代数学〕ともう1、2学期分の化学とを、できるだけ早くわたくし共の教育課程につけ加えたいと思っております。」(ソール書簡1890年4月11日)とすでに先を見据えています。

1年の課程とはいえ、リベラルアーツ教育を視野に、理数系の科目を教えているという点が注目に値します。できるだけ早くさらに高度なカリキュラムを持ちたい—その願いは高等科設置から6年後の1891年に3年制の高等科として結実します。この課程がカレッジ課程と呼ばれ、現在の神戸女学院大学のカリキュラムへと続いていくのです。

<オフィスの宝物>

学則・入学案内

神戸女学院史料室は学院の歴史に関する史資料を取り扱っている部署ですから、学生さんと直接かわる機会も少なく、どこにあるのか、何をしているのか、どんなものがあるのか、学内でもあまり知られていないところではないかと思えます。事務室・書庫は図書館本館の1階にあって、学院史についての史資料の整理・保存、史資料に関する様々なレファレンス業務を行なっています。

基本的には古いものに囲まれた毎日なのですが、実は、オリジナルの史料をそれ程多く持っているわけではありません。多くないオリジナル史料の中で宝物といえるのが「学則・入学案内」です。

これらは、欠落している年もありますが、神戸女学院が高等教育を始めたころの1887年（高等科開始は1885年）から戦後新制大学・中高部が誕生するまでのほぼ全期間揃っています。神戸女学院という学校がどのような歩みをしてきたのかを、カリキュラムを通して通覧できる第一級の一次史料です。学外の研究者からも問い合わせのある貴重な史料です。今は、オリジナル保護のため現物をご覧いただけませんが、資料はデジタル化されていますので、どなたでも閲覧できます。

史料室は学生の皆さんにも利用していただけたらと思いますので、学校の歴史に興味のある方は、事務室のドアをノックしてみてください。

(神戸女学院史料室)



学校便覧

教職センターの宝物

教職センターは、デフォレスト記念館2階にあります。当センターでは、教職課程を履修する学生のサポートに務めています。また、その年度に教員採用試験に合格した在学生・卒業生に依頼して「教員採用試験合格体験報告会」も開催しています。夢を追いながら頑張り夢を叶え、同じ夢を追う後輩のために、忙しい中時間を割いて駆けつけてくれます。そして、自分の経験した教員採用試験までの紆余曲折を語りながら、合格までのアドバイスを惜しみなく後輩たちに伝えてくれます。

中学校や高校で講師をしながら勉強を続けた大変さは、並大抵のことではありません。土日には図書館で10時間勉強していたなどの、さまざまなエピソードを聞かせてくれます。それを、おっとりとした神戸女学院生特有の可愛らしさで語ってくれるのです。この可愛らしさのどこにそのような強さを秘めているのかと驚かされることが多々あります。謙虚で穏やかな印象を一見受けますが、しんが強く、頑張り屋の卒業生たち。授業の空き時間に学校ボランティアに励み、少しでも学校現場を知ろうとする在学生たち。自分も合格し報告会で後輩に伝えようと、この意志や頑張りが受け継がれていきます。

このような素敵な学生たちが、教職センターの大切な宝物です。その輝きが、私たちに力と喜びを与えてくれます。ひとりでも多くの夢が叶えられるよう、サポートしていきたいと思えます。

(教職センター)



オリエンテーション風景

新刊紹介



吉田和志(総合文化学科教授) 編著

『神戸女学院大生が聞く
女性の仕事・働く意味』

神戸女学院大学文学部
総合文化学科 吉田和志
2014年10月刊 110頁

本書は、本学総合文化学科ご所属の吉田和志先生による基礎ゼミの期末レポート課題の成果として出版されたものである。「ことばとコミュニケーション」をキイに掲げたゼミで読む・書く・発表するなどの実践を繰り返した一年生たちが、最終課題として挑むのが仕事に励む女性たちに対して行う「聞き書き(インタビュー)」実践である。それぞれの聞き書き記事には写真が添えられ、話し言葉による雰囲気もそのままに、生き生きとした表情を伝えてくれる。

インタビューたちの職業は多岐にわたる。ハンドメイドショップ経営者、ステージマン、化粧品開発者や美容師、高校教諭やバレエ・書道などの講師、音楽療法士、地域情報誌の販促プランナーや新聞記者など。女性たちの職業選択とは、なんと多彩なのだろう。自らの適性を生かした「しなやかな」職業選択の実例に触れた学生たちが、後に社会に出ていくためのライフモデルをそこに見出してほしい——課題には、そうした願いが込められている。

インタビューたちの多様な声とともに本書に織り込まれるのは、様々な局面で立ち上がる主体的な学びの痕跡である。聞き書きは多くの手順を含む。このひとの声を聴きたいと思う相手を自ら選び、聞きながら考え、質問し、返ってきた回答を書き起こし、文章にまとめていく。その文章はいつかこうして誰かに読まれる。プロセスのひとつひとつで立ち上がる、主体的な学び。ここで重要なのは「学校」でも「教師」でもなく、ことばの力。私たちが学校教育へと入っていく前から、すでに自分のものとしていることばそのもののもつ力なのである。

「ことばとコミュニケーション」——このテーマにこれ以上相応しい実践を私は知らない。本書からも十二分に窺い知ることのできるその成果を、18名のゼミ生たちは真に体感したに違いない。

(総合文化学科准教授 奥野 佐矢子)

その他の新刊一覧

石川康宏(総合文化学科教授) 他著

『若者よマルクスを読もうⅡ 蘇るマルクス』

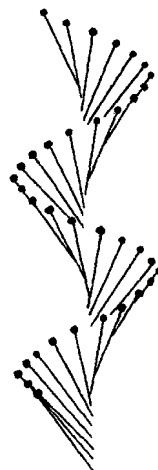
(かもがわ出版)

石川康宏(総合文化学科教授) 他著

『闇があるから光がある』

—新時代を拓く小林多喜二—

(学習の友社)



大学報告

仕事発見セミナー ～学生が学内で企業と出会う場を創出～

キャリアセンターでは今年度後期より、企業や業界、仕事を知るためのキャリア教育企画「KC キャリアフォーラム」をスタートさせています。

この企画の第一弾として、10月から「仕事発見セミナー」を開催しました。このセミナーでは、「仕事」にフォーカスし、世の中にある仕事の具体的な内容や、そこで求められるスキル・能力などについて、企業の方にご講演いただきました。今回、本学出身者が多く在籍する金融業界を始め、メーカーや商社、そして放送業界や航空業界まで幅広い業界の方のご協力を得て、全22回のセミナーを開催しました。各回とも、就職活動を目前に控えた3年生だけではなく、将来のことを考え始めた1・2年生も熱心に参加していました。

キャリアセンターでは、学内で学生が企業や社会人と出会い、将来について具体的に考えられる場を可能な限り多く用意するという方針を立てています。今回の「仕事発見セミナー」もその一環です。2月には「KC キャリアフォーラム」の第二弾として「企業研究セミナー」を開催します。ここでは約40社の企業にお越しいただき、「企業」や「業界」についてご講演いただく予定です。

今後も、引き続き学生が企業や社会人に出会える場を多く創出し、学生がよりよき就職や進路選択を行えるようにサポートして行きます。

(キャリアセンター職員)



放送業界のセミナーの様子

セントジョセフ・カレッジ(インド)と 大学間協定を締結

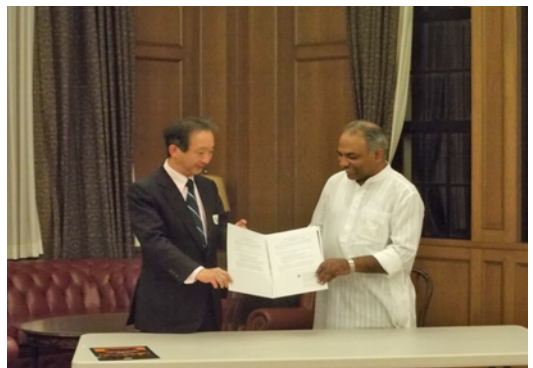
2014年10月、本学とインドのセントジョセフ・カレッジ商科校 (St. Joseph's College of Commerce) との間で、大学間協定が締結されました。これにより今後、本学のインド体験学習プログラムや相手校の日本文化学習プログラムが、一層充実したものになることが期待されます。

セントジョセフ・カレッジ商科校は、インド南部の大都市ベンガルール(旧称バンガロール)にある商学部の単科大学です。創設100年以上の伝統を誇るカトリックの男女共学校で、学生総数は1200人前後と小規模ですが、学生の英語運用能力は高く、インドの入試難関大学ランキングで毎年トップ10に入るなど、優秀な学生が集まっています。

本学とセントジョセフ・カレッジ商科校との交流が始まったのは、2010年9月でした。私がゼミ生を引率して、インドのフィールドスタディーを行う際、現地の大学との交流を模索していたところ、現学長のダニエル神父から訪問受け入れのお返事を頂きました。交流会では、インドの学生が民族舞踊や音楽のパフォーマンスを披露し、私たちも日本の歌を紹介して、楽しいひと時を過ごしました。

同年10月には、インドから日本文化を学ぶために学生3名と引率教員1名が本学を訪問しました。こうして両校の交流がスタートしたのですが、それから4年が経ち、更なる学術交流の展開を目指して協定が締結されました。

(総合文化学科准教授 北川 将之)



協定調印式の様子 (左) 本学の飯学長
(右) セントジョセフ・カレッジのダニエル学長

2014年度音楽学部定期演奏会報告

2014年度の音楽学部定期演奏会は、11月26日(水)午後6時30分より兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホールに於いて行われた。今回は、4年ぶりのベートーヴェンの交響曲第9番をメインに、モーツァルトのフィガロの結婚序曲、デュカスの交響詩「魔法使いの弟子」が演奏されました。

いつも定期演奏会では、音楽学部教職員と学生が丸となって時間をかけて準備に入り、当日も全員でステージの成功に向かって、全力で運営しています。今回は、初の試みとして、辻井 淳准教授の率いる小編成のオーケストラによるモーツァルトの序曲で島崎 徹教授振り付けによる舞踊専攻3年生8名がステージで踊るというコラボレーションが、時間は短かったものの好評で、オーケストラバックの大ホールで踊れた学生にとっても、良い経験となりました。



デュカスは、ディズニーのファンタジアでもおなじみの名曲を多彩な演奏で楽しませました。また、メインの「第9」は、ソリストに、斉藤言子教授、山田愛子非常勤講師、松本薫平准教授、萩原寛明非常勤講師、中村 健教授の指揮、音楽学部オーケストラ、合唱団で演奏されましたが、今回男声合唱は、一般からボランティアを募り集まってくださった100名程のメンバーに、院長、学長、その他教職員の応援もあり、高らかに歌い上げられた歓喜の歌は、937名の入場者から絶賛の拍手をいただきました。

ステージで演奏したメンバーだけでなく、素晴らしい曲目解説をお書きくださった孟真理先生、そして演奏会を支えてくださった学内、学外のすべての皆様にこの場をお借りして心からお礼申し上げます。



(音楽学科長 田中 修二)

第39回神戸女学院大学英語英文学会 (KCSSES) 大会報告

神戸女学院大学英語英文学会 (KCSSES) と改称して5年目となる本年度も、KCSSES は例年通り11月の最終金曜日、28日に午後2時からL-28教室で開催された。今回は言語コミュニケーションコースが学会準備を担当した。

特別講演は、明海大学副学長・慶応大学名誉教授の大津 由紀雄氏をお招きし、『有識者会議に委員として参加して見えてきたこと―「ことば」の不在と教育の両極化』という標題にてお話いただいた。現在「グローバル社会に対応する英語コミュニケーション能力養成」の旗印の下行われている英語教育改革が抱える問題点を的確にご指摘いただき、参加者よりも盛んに質疑応答があった。大津先生には、大変貴重なご講演をいただき、心より感謝致したい。

研究発表では、本学大学院通訳翻訳コース修了生2名が発表した、まずは、岡田 奈知氏より『通訳者・翻訳者に対する社会的認識の変化と地方通訳者・翻訳者が担うべき役割について』の標題にてご発表いただき、その後、南野 やよい氏より、『大学学部生の英語運用能力向上を目的としたパラフレージング訓練の実験的研究』についてご発表いただいた。

来年度、2015年度は英米文学文化コースが学会準備を担当し、第40回大会を開催予定である。ご参加の皆様及び日頃 KCSSES をご支援いただいている会員の皆様に厚く御礼申し上げる。

(英文学科長 立石 浩一)



学生寮音楽学部生有志による チャリティーコンサート

寮生の音楽学部生有志によるチャリティーコンサートが11月28日(金)にめじらウジで開催されました。2011年の東日本大震災復興の支援を目的として始められ、今回で四回目となりました。

このコンサートを立ち上げた卒業生の意志を継ぎ、3回生が中心となって準備を進め、日々の練習に加え演目の練習も重ねてまいりました。熱心な活動に賛同する他学部の寮生がポスター作成や司会などでの参加を申し出て、寮生ならではの手作りコンサートとなりました。

ピアノの連弾やハープ、フルート、オーボエによる馴染みのある曲目の演奏に加え、今回はピアノと声楽の演奏で舞踊が演技をするというスタイルに初挑戦もあり会場は大いに盛り上がり、楽しいひと時となりました。

約60名の参加者をお迎えし、7万2千円の収益金は昨年同様チャプレン室を通じて福島県の社会福祉法人牧人会の知的障害児入所施設「白河めぐみ学園」と「白河こひつじ学園」におさげいたしました。

年末のお忙しい中、貴重なお時間を割いてご参加くださいました学生、教職員の皆様、そして学生たちに活躍の場を与え、ご協力くださいました大学関係部署の皆様に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。今後も被災された方々を覚え、学生自ら可能な形で寄り添い続け、愛神愛隣の精神をつなげていけますように祈っております。

(学生寮 舎監)



舞踊専攻第5回卒業公演

去る12月4日、5日、6日に本学エミリーブラウン館にて第5回舞踊専攻卒業公演が行われました。3日間に渡り4公演というハードなスケジュールを、連日会場にお越しいただいた満員の観客の皆様を支えられ無事に終了することができました。

今回の卒業公演では、フランスよりトーマス・ドゥシャトゥレさんをお招きし、4年生のために約1カ月間をかけ新作を創っていただきました。

プログラムは島崎振付による「The Absence of Story」

この作品は Johannes Brahms の音楽にのせて以前に女性7名、男性6名に振付された作品を今回のために女性9名の作品としてリメイクしたもので、コンテンポラリーダンスでありながら、バレエの要素を多分に含んだ振付で、4年生が本学で学んだ舞踊に対しての柔軟性を示すことができたと思います。

2作品目はドゥシャトゥレ氏による「Crossfading」

それぞれの学生の個性が観ている方に伝わる心暖まる作品でした。

そして最後に島崎が創りました新作「Zero Body」

今までに例をみない程、肉体的に過酷な振付でしたが、技術面、精神面のバランスが良くとれた今年度の4年生らしく、仲間同士お互いを支え合いながら、それぞれの責任において問題点を克服し、観客を感動させるという同じゴールに向かって最終日まで、下級生も含め舞踊専攻一丸となり幕を閉じることができました。

(音楽学科舞踊専攻教授 島崎 徹)



Zero Body

2014年度 卒業論文題名

~~~~~  
文学部 英文学科  
~~~~~

~~~~~  
文学部 総合文化学科  
~~~~~

~~~~~  
2014年度 音楽学部卒業演奏会演奏曲目  
~~~~~

2014年度 卒業論文題名

~~~~~  
人間科学部 心理・行動科学科  
~~~~~

~~~~~  
人間科学部 環境・バイオサイエンス学科  
~~~~~

2014年度 博士論文題名

~~~~~  
文学研究科  
~~~~~

2014年度 修士論文題名

~~~~~  
文学研究科  
~~~~~

~~~~~  
2014年度 音楽研究科修了公開試験曲目  
~~~~~

2014年度 博士前期課程・修士論文題名

~~~~~  
人間科学研究科  
~~~~~

個人情報保護のため、20ページ目右段から
40ページ目左段は削除しています。

<先輩からのメッセージ>

『ワーク・ライフ・バランス』を目指して

協本 春佳

(文学部総合文化学科卒業)



私は2005年に大学を卒業後、半年間公務員試験の勉強をし、2006年4月から豊中市の公立小・中学校に事務職員として勤務しています。

仕事内容は、予算編成、物品の発注・管理、教科書管理、転出入の手続きや学割の発

行、徴収金事務、職員の給与・旅費・福利厚生と多岐に渡り、それを各校に1人ないし2人といった少数人数で一手に担います。単調に見えるこれらの事務ですが、裁量が広く与えられているため、工夫次第で仕事をどんどん開拓していけるところに面白さを感じています。その他にも、学校ごとに特色ある行事や、季節に合わせた催しがあり、デスクワークだけではなく変化に富んだ日々を送れることも魅力です。

私は現在育児休業中ですが、結婚・出産・育児を経てもキャリアを継続できる充実した福利厚生を活かして、復帰後は時短勤務をしながら家庭と仕事の両立ができればと思っています。限られた育児休暇だからこそ、今日は何をしようかと考え毎日を大切にしています。仕事を続けていくうえではやりがいと達成感が必要だと思いますが、一方で充実した私生活も心の豊かさのためには重要だと思います。そのためにも、卒業後にどんな生活をするのか、10年後にはどうなっていたいかをぜひ考えてください。

1週間は長くても、1ヶ月、1年が過ぎるのは本当に早いです！皆さんが公私ともに充実した人生を歩まれますことを心よりお祈りしております。

2015年度大学入試結果（中間2/24現在）報告と概要

2015年度は入試制度を以下のとおり大幅に変更いたしました。1点目は一般入学試験前期A日程において3科目型を導入し2科目型と併願可能にしたこと、2点目は同じくA日程に日本史・世界史を追加したこと、3点目は入学金を40万円から20万円に減額したことです。その結果一般入学試験前期A日程では延べ1,100名（昨年比162.5%）の志願者を集めました。B・C・D日程では、伸び悩み、前期での総志願者数は延べ2,158名となり昨年度とほぼ同数となりました。志願者の内訳を見ますと、文学部英文学科は581名（昨年比102%）、総合文化学科は834名（同比106%）、音楽学部音楽学科は33名（同比157%）、人間科学部心理・行動科学科は454名（同比105%）、環境・バイオサイエンス学科は256名（同比73%）という結果になりました。

本学では基本的に年内入試での入学者の割合を減少させ、一般入試での入学者比率を上げる努力を続けています。

しかし今年度も昨年同様、景気停滞の影響により

学費の安い国公立大学志向、地元志向、資格重視の傾向が続いています。

試験は1月29日、30日、31日、2月17日の4日間で実施し、2月10日にA・B日程606名、2月24日にC日程97名、D日程55名の合格者を発表しました。

大学入試センター試験を利用する入試（以下DNC試験）（前期日程）では昨年比116%の418名が受験し、成績上位層の獲得を目指し、2月14日に254名の合格者を発表しました。

今年度の一般入試後期日程は、3月7日に文学部、人間科学部で実施されます。また昨年から導入しましたDNC試験（後期日程）を実施いたします。

本学の志願者数は2,521名から2,576名へと微増いたしました。本学としては大きな変更を実施しましたが、納得のいく結果が出ていません。次年度以降も受験生増加へと好転するよう積極的に学生募集活動を実施してまいります。

（入学センター・広報室課長）

〈神戸女学院大学の企画による2015年度夏期語学研修参加者募集〉

2015年度の夏期語学研修は、次の4プログラムが実施予定です。詳細は4月作成予定の募集要項をご参照ください。また募集説明会を実施する予定です。日程は、決定次第、国際交流センター掲示板とK-CLIPで告知します。春期（2016年2～3月）にも語学研修を予定しています。詳細は国際交流センター（デフォレスト館1階）まで。TEL：0798-51-8579 Email：kokusai@mail.kobe-c.ac.jp

第6回 西オーストラリア大学（豪州）

時期：2015年8月～9月 募集人数：20人 参加費用：約55万円

西オーストラリア州のパースにある自然豊かなキャンパスで、約4週間、総合的に英語を学ぶ。ホームステイの予定。

第1回 ケンブリッジ大学（英国）

時期：2015年8月～9月 募集人数：15人 参加費用：約75万円

ケンブリッジ大学ヒューズホールにて約4週間の英語研修を受講する。午前中英語集中レッスン、午後はケンブリッジ大学生とのフィールドワーク。ホームステイ。

第6回 カリフォルニア大学アーバイン校（米国）

時期：2015年8月～9月 募集人数：20人 参加費用：約65万円

他国の留学生と共に約4週間、基礎および応用英語を学ぶ。英語力によっては、ビジネス英語クラスを受講することも可能。ホームステイ。

第4回 ヨーク大学（カナダ）

時期：2015年7月～8月 募集人数：20人 参加費用：約60万円

多文化都市トロントにあるカナダで3番目の規模を誇るヨーク大学にて、約4週間の英語研修を受講する。現地学生との交流や学外活動も含まれます。大学内寮に宿泊。

<受入れ留学生報告>

私の日本での留学生活

徳成女子大学交換留学生

初めまして。韓国の徳成女子大学から来ました。昨日、日本に来たように感じますが、韓国に帰るまで日があまり残っていません。本当に楽しく過ごした半年なので、帰国するのが本当に悲しいです。

韓国を長く離れることは初めてなので、日本に来る前は不安でしたが、到着してすぐそのような不安はなくなりました。最初の日、空港までバディが迎えに来てくれました。学校に着くまで不慣れな私たちにずっと言葉をかけてくれて、日本人は優しいんだと感じました。

今考えてみると、私にとって最も幸運だったのは良い留学生の友人に出会えたことです。韓国、中国、イギリス、アメリカから来た留学生で、全員が本当にすぐに親しくなり、何でもみんなと一緒にするようになりました。今この中で一人でもいないと寂しいと思うほど仲良くなりました。

留学生活を通して私が最も大切だと思ったのは、すべてのことに積極的に行動することです。自分の行動は、他の国の人が韓国を評価する基準になることがあるので、様々な行事にも積極的に参加することによって、自分を含め徳成女子大学、さらに韓国のイメージも良くなると思いました。

留学に来なかつたら本当に後悔したと思うほど満足しています。外国語を勉強しながらその国の人々と交流し、その国について知ることができたことは、私の世界観の形成に大きな助けとなり、人生の転機となりました。そして、次に日本に来た時に会いたいと思う友人ができたことは、何にも変えることができない宝物になりました。交換留学生として与えられた機会を利用すれば、自分の可能性をもっと高めることができると思います。

最後に、私の留学生活に多くの助けを与えてくれた先生方とバディ、日本人の友達に感謝の気持ちを伝えたいと思います。本当にありがとうございました！

日本での素敵な経験

徳成女子大学交換留学生

昨年9月に留学生として神戸女学院大学に来て、毎日夢のような日々を送っています。

私は韓国で日本語を専攻しているので、日本で生活しながら日本語を学びたいと考え、交換留学生に応募しました。しかし、合格の知らせを聞いたとき、私は喜ぶことよりも不安になりました。韓国ではなく外国で勉強しなければならないこと、生まれて初めて家族と離れて暮らさなければならないことが私をさらに不安にさせました。

しかし、高校3年生の時に書いた「心配が多ければ、前に進むことができない」という日記の文章を見て、「心配しても変わることはない。ただ変化を楽しもう」と考えを変えることにしました。

そして、実際に体験した日本は想像していたよりもいいものでした。半年という短い期間でしたが、韓国で20年間生活しながら習ったことよりも多くのことを学び、経験した気がします。留学生歓迎会をはじめ、色々な交流会、クリスマスパーティーといったイベントは本当に素敵な経験でした。

日本に来て私は日本語だけではなく、たくさんのことを学びました。また、学校の勉強で学ぶことが勉強の全てではないと感じるようになりました。韓国ではなく、日本の文化に触れながら、生きている日本を感じるの、学校の中では決して学ぶことができない大切な経験です。日本のお祭りに参加して協調性を学んだり、小学校を訪問して子供たちと交流したりしながら、韓国とは異なる日本の素敵な姿を体験することができました。神戸女学院大学へ留学に来なかつたら、一生経験することができなかったことばかりです。

もし、挑戦することを迷っている方がいるなら、私は「迷わず、挑戦してください」と伝えたいです。心配が多ければ、前に進むことができません。変化を楽しむ人だけが成長できるのです。半年間、本当にありがとうございました。

研究所活動報告

講演会

〈前期：2014年6月20日〉

「共に『痛み』を担うために：非宗教的カウンセリングにおけるスピリチュアリティの位置づけ」

横田 恵子 総合文化学科教授

〈後期：2014年10月31日〉

シューマン

森の情景 Op. 82より

ブラームス

ピアノとヴァイオリンとホルンの為のトリオ Op. 40

ピアノ	山上 明美 名誉教授
ヴァイオリン	辻井 淳 音楽学科准教授
ホルン	池田 重一 音楽学科非常勤講師

研究所総会研究発表

〈前期：2014年6月27日〉

「東南アジア擬態研究の旅」

遠藤 知二 環境・バイオサイエンス学科教授

アリ以外の生物がアリに似ていることを、「アリ形」現象という。「アリ形」は節足動物のさまざまな分類群で少なくとも70回は独立に進化したといわれるほど、普遍的な現象である。アリに似ると何がありがたいのか。カマキリ、ハエトリグモ、カリバチなど視覚の発達した陸上節足動物捕食者は、いずれもアリを嫌う。集団行動するアリは攻撃的な厄介者だからである。捕食者として大きなインパクトをもつこれらのグループが生得的アリ忌避行動を発達させたことによって、「アリ形」生物が忌避行動を自らにミスリードさせて生存上の利益を受けることが可能になった。こうして「アリ擬態」が進化したと考えられている。アリ擬態グモはその代表格だ。

熱帯でのアリは、多様性と豊富さからいって陸上生態系を駆動させる主役級の生物である。捕食者であるハエトリグモなどのクモも、熱帯林では驚くほど多様で個体数も多い。アリ擬態グモがアリと節足動物捕食者のすき間にニッチを開拓したのであれば、両者が多様な熱帯では、アリ擬態グモもまた多

様であるはず。一見あたりまえの予想だが、それを確かめるために、科学的な知見のピースを拾い集め、生物の多様性を生み出す要因を探る…というような目的のもと科研費を得て、ここ数年研究チームの一員として東南アジアの熱帯林で調査を続けている。

多様性とは、一方で希少なものの存在が許されているということでもある。熱帯での研究は、この希少性の壁にぶちあたって遅々として進まない。それでも研究チームの成果として、徐々に熱帯林におけるアリ擬態グモの構成が浮かび上がり、擬態による防衛効果と採餌のトレードオフ関係などがわかってきた。研究の成果が熱帯の自然とその多様性を守るためにわずかでも貢献できればよいのだが。

〈後期：2014年12月5日〉

「米国精神分析の最近の流れについて」

吾妻 壮 心理・行動科学科教授

精神分析はS.フロイトによって考案された心の理論であり、治療の方法である。治療方法としての精神分析は、1回45分から50分の面接を週4～5回行い、これを年単位で続けるものである。精神分析以降、様々な心理療法が考案されてきた。薬物療法も発展を続けている。しかし、昔ながらの精神分析も依然として続けられている。

精神分析の適応は、神経症水準と呼ばれる患者、および、それより病理の重い境界水準と呼ばれる患者の一部である。精神分析的な心理療法は、精神分析を簡略化したもので、広く実践されている。精神分析的な心理療法の適応は精神分析のそれよりも広く、神経症水準および境界水準の患者が対象となる。

精神分析にはいくつかの学派がある。主な学派として、自我心理学派、クライン派、独立学派、自己心理学派、そして関係論学派が挙げられる。フロイト理論においては、欲動論を基本とした精神内界の探求が重要視されていた。米国では長年、この流れを踏襲した自我心理学が主流であった。しかし、米国の新しい精神分析の流れである自己心理学および関係論においては、欲動よりも関係のあり方そのものが重要視されている。精神内界と現実の対人関係の両方における関係性の探索を強調する関係論は、分析家と患者の相互交流の重視、分析家の主観性の

重視、現実についての構築主義的理解などによって特徴づけられる。分析家の主観性が分析の場に暗黙裡に影響を及ぼしてしまう現象はエナクトメントと呼ばれ、重要な技法論的な含意を持つ。夢の内容が夢を分析する面接の場にそのまま展開されてしまう事態は、夢の循環再エナクトメントと呼ばれ、精神内界的な夢解釈の技法だけでは分析臨床を乗り切れない可能性を示唆した。

米国精神分析の一つの流れは、ここに説明した関係論の流れである。他にもいくつかの新しい流れがある。このように、米国精神分析は多様化の道を辿っている。

専門部会研究発表会

1. 音楽学科 2014年6月11日
「作曲／パフォーマンス／言葉
—創造の現場における循環」
久保田 翠 専任講師

2. 英文学科 2014年6月18日
「Japanese History: From the Outside In
—日本の歴史—外部者の視点から」
David G. McCULLOUGH 教授

3. 総合文化学科 2014年7月10日
「言語で『傷つけられる』とはいかなることか
—J. バトラーにおける Vulnerability 概念を
手がかりに—」
奥野 佐矢子 准教授

4. 総合文化学科 2014年10月20日
「子育てひろばと会話分析」
戸江 哲理 専任講師

5. 心理・行動学科 2014年11月13日
「『いじめ』と子どもたちの心」
小林 哲郎 教授

6. 英文学科 2014年11月25日
「L2 Dynamic Assessment
第二言語ダイナミック・アセスメント」
Nathaniel CARNEY 准教授

専門研究会

1. 2014年7月21日
「Revisiting Human Rights: Sociology and the
Capabilities Approach」
Professor, Deree College, Athens, GREECE
Spiros Gangas 氏

2. 2014年12月12日
「日本オルガン教育の現状と女学院の可能性」
聖徳大学音楽学部演奏学科器楽コース
大学院音楽文化研究科教授 松居 直美 氏

3. 2015年1月21日
「My view of contemporary art
from GUTAI onward」
Professor, Korean University of Foreign Studies
Yves Millet 氏

助成・補助

出版助成	2件
研究助成	6件
総合研究助成	5件
研究補助	1件
研究成果配布補助	12件
専門研究会補助	3件
専門部会研究発表会	6件
国際学会出張補助	7件

発行物

『論集』第61巻第1号（通巻第172号）2014年6月発行
『論集』第61巻第2号（通巻第173号）2014年12月発行
(研究所)

女性学インスティテュート活動報告

特別講演会

2014年4月25日
 「女性差別撤廃、ジェンダー平等の実現という課題にめぐりあって～わたしの物語～」
 特定非営利活動法人 グループみこし 理事長
 米田 禮子 氏

連続セミナー

テーマ「母と娘」(全4回)

〈第1回〉 2014年5月23日
 「摂食障害と母娘関係」
 生野 照子 名誉教授

〈第2回〉 2014年5月30日
 「母と娘—その光と闇—」
 國吉 知子 人間科学部心理・行動科学科教授

〈第3回〉 2014年6月6日
 「母たちと娘たちがいる風景：子育て支援の現場から」
 戸江 哲理 文学部総合文化学科専任講師

〈第4回〉 2014年6月13日
 「夜も更けた室内で、母娘の憎悪は燃え上がり—
 —イングマール・ベルイマンの『秋のソナタ』」
 高村 峰生 文学部英文学専任講師

学生懸賞論文(第16回女性学インスティテュート賞)

1編応募。最優秀賞該当なし。優秀賞1編。

優秀賞：中川 侑香さん(2014年3月文学部卒)
 The Sexual Revolution in the 1960s and the Crisis of
 Masculine Identity in Raymond Carver's "Vitamins"
 (レイモンド・カーヴァーの「ビタミン」における
 1960年代の性革命と男性のアイデンティティの危機)

授業

Cu134(1)(2) 「女性学(実践編)」
 Cu234(1)(2) 「女性学(理論編)」
 Cu133(1) 「ジェンダー・スタディーズ(I)」
 いずれも講師複数名によるオムニバス形式

インターディシプリナリープログラム

1名修了。

助成・補助

研究助成 1件

発行者

『女性学評論』第29号(2015年3月発行)
 「ニュースレター」No.57(2014年10月発行)
 「ニュースレター」No.58(2015年3月発行)

女性学(実践編)(理論編)テキスト

『語り継ぐ女性学—次代を担う女性たちへのメッセージ』(2015年1月発行)

(女性学インスティテュート)

<私の研究>

私の研究テーマ

横田 恵子



私の場合、20代で修士課程を修了後に精神科心理療法の実践者となり、その後は児童～思春期の福祉・教育、母子保健へと経験の幅を広げていきました。さまざまな訴えや問題を抱えた人々と関わるうちに、自身の問題関心は「医療

ケアを巡る専門性、政治性」に収斂していき、きちんと考えてみたいと思うようになりました。そこで1996年に新たに博士課程に所属し直して研究者への道を志し、結果的に現在に至ります。

現在でも病棟や保健所などで相談を受けながらこの問題を考えているのですが、関わる領域は精神科領域ではなく、癌緩和ケアと HIV/AIDS に実践領域を収斂させています。どちらの病も最先端の医療（生化学的な成果）が次々に投入される領域であるにもかかわらず、ある時期に「死」の問題と直面しなければならぬ病もあります。そしてこの領域の専門医や看護師と関わり続けることで私自身新たに気づいたことは、「病と死」にかかわるテーマに向き合わざるを得ない医療者のとまどいや苦悩でした。

看護研究という領域では、すでにこれらの問題群が多く研究されていますが、私自身は社会的なまなざしで違った角度から見直すことができるのではないかと思いつつ、あれこれ考えあぐねているところでしょうか。

さらに HIV 感染症という領域でカウンセリングを引き受けていると、生殖や性の問題にも直面することになります。その地続きで視野に入ってくるのは「出生前診断」や「不妊治療」、「遺伝子診断」をめぐる決定、そこにどのような医療倫理を適用すべきなのかという議論です。すでに実用化されている技術に実践レベルの倫理によってどこまで論を立て、世に問うことができるのか突きつけられているとも思われ、この領域でも研究を進めて行こうと思っています。

(総合文化学科教授)

私の研究

久保田 翠



私の音楽研究は、大きく分けて実践（作曲及びパフォーマンス）と、文献ベースの研究による論文執筆の二つに分けられます。

作曲については、多くの場合合奏楽器奏者や歌手との共同作業となります。まず楽譜を完

成させるまでの過程が試行錯誤の連続であり、最終的な形にするまでには多大なエネルギーと決断力を必要とします。そして更に実際に音にする段階においては、演奏者との話し合いや実験を通じ、様々な可能性を探求することになります。リハーサルの段階でよいアイデアが浮かべば、積極的にそれを採用することもあります。

時には自らパフォーマンスも行います。通常の意味での音楽作品のこともあれば、演劇的な作品のこともあるのですが、自分の身体を通じて作品を実現することで、より深く音楽を理解することができるように思います。

文献ベースの研究においては、アメリカを中心とする戦後の実験音楽を主たる領域としています。ジョン・ケージやクリスチャン・ウォルフといった「音楽」の定義を揺るがすような作曲家達の試みは、単に歴史として学びがいがあるだけではなく、自分の作品制作にとっても多大な刺激を与えてくれます。

実践と執筆、これらを両立するのは時に容易ではありません。しかし過去から学んだことを糧として次の段階へと進むという点は、それら両方に共通しているのではないのでしょうか。音楽は組み尽くしても組み尽くせない豊かな源泉ですので、常に多角的に研究していきたいと考えております。

(音楽学科専任講師)

<ゼミ紹介>

生と死、いのちを考える

中野 敬一

私の専門分野はキリスト教の「実践神学」で、主に葬送儀礼に関する研究を進めてきました。葬式や記念式、墓制、他界観などが具体的な研究対象です。あわせて「死」を扱うことは「生」への考察が必然となりますから、「いのち」に関することへ射程を広げ、たとえば昨今の生殖補助医療や臓器移植、延命治療、尊厳死などについての関心を高めています。少子高齢化や医療技術の進歩に対して、倫理や人権に関する問題解決には追いつけないのが実情ですが、将来的にも欠かすことのできない研究分野であると思っています。

ゼミでは学生同士の討論を大事にしています。いずれのテーマも彼女たちの将来に直結してくる可能性があるため議論は白熱したものとなり、価値観の相違点が比較的是っきりと見えるのが面白いところです。安易に一つの方向へと流れようとするときには、別の視点からの問題提起を促します。結論が押し戻される感覚を知ってもらいたいと、時折私も割って入ります。直ぐに納得されるのも困るとばかりに別の話題も提示します。要するに学生の皆さんが物事を多面的に見る目を養う機会となることを願っているのです。特に「いのち」に関する事柄ですからなおさらのことでしょう。

キリスト教や宗教思想全般を取り上げる機会もあります。私のゼミでは現代社会と宗教についてのテーマが多くなりますが、やはり多様性を重視しながら、本当に重要なものを見極める力の涵養を目標としています。

(総合文化学科准教授)



通常ゼミの1コマ

身の回りのものを用い
汚れた水を浄化する。

張野 宏也

私の研究室では、多種多様な環境問題の中で、学生自身が興味をもっていることをテーマにして卒業研究を行っています。

本大学に着任直後、“卒業研究で何をしたい。”と学生に尋ねると、“雨水を身近なものを用いて処理し飲めるようにする研究をしたい。”という答えが返ってきました。これまでの私の研究は、環境中に存在する汚染物質の測定方法を開発し、それを用いて水質調査をすることが主だったため、新たな分野である浄化についてどのように実験を進めていけばよいのか戸惑いましたが、とりあえず雨水の水質を調べてみました。思いもよらず雨水はきれいであり、一般細菌数を改善すれば、少しは飲んで健康に影響がないことがわかりました。試行錯誤の結果、レモンや酢を加えることで一般細菌数を減少させることができ、地震などでライフラインがストップした場合の緊急時の飲み水として、短期間であれば代用できることがわかりました。それから7年、水処理に興味を持つ学生は多く、竹林増加に伴う竹の再利用を鑑みた竹炭による生活排水の浄化、陸上植物の水耕栽培や水草等による人工有機汚染物質の水中からの除去といった水処理に関する仕事が拡大しました。

研究は一人で行っていても、発展はありません。学生の考えを取り入れることで、研究範囲が大きく広がります。これからも学生のアイデアを参考にし、身近で役立つような環境研究を発展させていきたいと考えています。

(環境・バイオサイエンス学科教授)



水草による水の浄化試験

<課外活動紹介>

[クラブ]

Dance Lovers

部長

私たち Dance Lovers は毎週月曜日、水曜日、木曜日の17時～20時まで、主に多目的室で活動しています。4月には新歓、5月には愛校バザー、6月には1年生初参加となる step up、10月には学祭と学内でダンスを披露する機会がたくさんあります。8月の合宿では、部内の親睦をさらに深めることができます。学外では、9月にSYMBOL神戸というイベントに毎年出演してします。SYMBOLとは京阪神ダンスサークル連盟で、女子大で唯一加盟しています。また、9月にはACE、2月にはla familleというイベントを主催、運営しています。その他、出演依頼のあったイベントへの出演や、個人での外部のコンテストやバトルなどへの個人的なエントリーも可能です。

年間を通してたくさんのイベントに参加し、多くの人と繋がることができます。また、イベント運営はとてもやりがいがあり、良い経験となるでしょう。「ダンラバは家族です!」というイベント前の掛け声の通り、部員は縦にも横にも繋がりが強く、日々ダンスの楽しさや表現の難しさなどを共有しながら成長しています。0から自分たちでショーやイベントを完成させる喜びを一緒に経験しませんか。基礎から練習するのでダンス未経験者も大歓迎です。興味はあるけれども自分が踊るのは少し恥ずかしいと思う方も、まずはショーを見に来ていただくと嬉しいです。たくさんのジャンルを体験することもできるので、ダンスがお好きな方はぜひ入部お待ちしております。



岡田山祭2014にて

[クラブ]

古典落語を聞く会

部長

私達は、『古典落語を聞く会』、通称『落聞』です。何をする部活なのかというと、神戸大学の落語部の寄席を見に行ったり、交流したりすることが主な活動内容です。また、岡田山祭では神戸大学の落語部の方々に来ていただき、『岡田山寄席』を開催します。神戸大学の落語部は有名なので、知っている方も多いのではないのでしょうか。

ところで、古典落語を聞いたことがありますか。古典落語というと少し敷居が高いように感じるかもしれませんが、落語にあまり興味がないと思っている方も少なくないでしょう。しかし、そんなことは気にする必要はありません。落語は誰でも楽しむことができるものです。実際、私もこの部に入るまで落語をしっかりと聞いたことがありませんでした。では、なぜこの部に入ったのかというと、あまり活動が頻繁ではなく、他大学の方と交流できる部だったからです。正直、落語が聴きたいという気持ちはそのあとでした。

しかし、初めて落語を聞いた時、少し衝撃をうけました。話す人の表現力に驚いたのです。一人一人のキャラクターが全部ちがっていて生き生きしています。さらに落語には、状況を表す表現や動作が多くあり、そういった表現によって、場面を自然に想像することができます。

きっかけはどうかあれ、私は落聞に入ってもっとたくさんの落語を見てみたいと思うようになりました。これからも落聞を通して、いろいろな落語が見られることが楽しみです。



岡田山寄席での様子

中高部報告

ファッションシューズコンテスト2015 受賞報告

高等学部 2年生

ファッションシューズコンテストは、靴への新しいアイデアや夢を表現したイラストをつくるもので、毎年全国から数多くの作品が寄せられます。主催は日本ケミカルシューズ工業組合で、日本デザイン文化協会理事長をはじめ、神戸文化服飾学院長、神戸芸工大教授などの方々による厳正な審査の下で行われています。今年のテーマは「神戸を感じる靴」。神戸といえば港と六甲山。靴の形は港に浮かぶフェリー。足首部分を折り返すと水兵さんのセーラー服に。靴ひもはセーラー服のスカーフ。靴を正面から見ると、ポートタワーが見えてきます。靴底には波の形が入っていて、歩くとフェリーが波の上を進みます。内側は山々をイメージさせる緑色にしました。

なかなかアイデアが浮かばず、締め切り前夜に慌てて一発勝負で描いた作品だったため、全く期待していませんでした。それだけに今回、高校生の部において最優秀作品賞受賞の知らせを聞いたときには驚くとともに嬉しさと胸がいっぱいになりました。締め切り当日に郵便局まで作品を届けに行ってくれた母には本当に感謝しています。

偶然目に入ったコンテストの案内のポスターがきっかけで軽い気持ちで応募しましたが、多くのことを学び、また刺激を受けることができました。これからも挑戦を続けていきたいです。

英文誌「*Journal of Chemical Education*」に報告された内容を取り入れた化学実験授業実践

「*Journal of Chemical Education*」は、アメリカ化学会が発行する月刊科学雑誌で、毎号、ユニークな実験教材が報告されている。今年度、公益財団法人未来教育研究所より研究助成を受け、この科学雑誌に掲載された記事を調査し、その調査に基づいた授業実践を行った。

調査では、報告されている実験が日本の教育課程や大学入試に沿っているか、生徒の興味・関心を喚起できる実験であるか、などの観点で内容を確認し、日本の教育現場において有意義と思われる実験を抽出した。その上で、記事の英文を参考に、実験操作や考察を英語で記述した実験教材を作成、授業実践を行った。実験内容については、未来教育研究所の研究紀要に掲載される予定なので省略する。

高等学部3年生で開講されている「化学特講」の授業で実践を行い、アンケートを行ったところ、約9割の生徒が「有意義であった」、「楽しかった」、「英文の実験内容が大体理解できた」と回答し、また7割強の生徒が「辞書を使わずに、英文の大体の意味が理解できた」との回答であった。

科学研究においては、英文で記述された論文を理解することが必要で、今回検討した教材による授業を高等学校の段階で経験しておくことは、生徒たちが今後、英語を道具として科学研究の場に踏み込んでいく際に役立つと思われる。さらに授業実践を行える教材の開発を続け、科学英語にも興味を持って取り組める生徒の育成を目指していきたい。

実験操作の英文を作成するにあたり、中高部英語科教員に英文のチェックをお願いした。この場を借りて、お礼申し上げる。

(中高部教諭)



塩化銅水溶液とアルミ箔の反応

冬の修養会「釜ヶ崎訪問」に参加して

高等学部 2年生

12月20日、S2の生徒13人と教員3名が地下鉄四つ橋線「花園町駅」に集合し、いこい食堂へ向かいました。

大鍋3杯分のお米を握り、味噌汁を作る奉仕をしました。いこい食堂では食べられるものは決して無駄にしないこと、おにぎりも出来るだけ食べやすいようにやさしく握ることの説明を受けました。食堂前の四角公園で炊き出しをおこない、雨が降り始める頃には用意したものはほとんど無くなっており、安心しました。

いこい食堂に戻って私たちも同じメニューを食べ、先生と交わりの時を持ちました。直前に選挙があったことから、住民票のないホームレスの選挙権や、マイナンバー制度について詳しくお話を伺いました。

参加者はそれぞれ今回の訪問の感想を言いましたが、一人ひとりの感じたことや、これからの目標に据えたものが違い、それもまた貴重な学びになったと思います。

私は今回の釜ヶ崎訪問に参加して、自分の勉強不足をひしひしと感じました。分からないなりに「釜ヶ崎」や「ホームレス」について詳しく調べておかなかったことへの後悔は大きく、調べておけば経験したこと以上に多くこのことを感じる事ができたのではないかと思います。

実際に参加することで、話を聞く以上に多くのことを学び得ます。これからもたくさんの人が釜ヶ崎訪問に参加して、学び、考え、貴い経験を得ることを願っています。

2014年度中高部冬山スキー

今年度の冬山スキーは、12月21日～25日に行われました。J3～S2までの生徒46名、引率教員10名が参加しました。技術レベルを初心～上級に分け4日間の講習を行います。今年は、天候に恵まれ、講習中は気持ちよく滑ることができました。講習3日目は、熊の湯までバスで移動し、各班に分かれて、標高2,307m 雲上の宿横手山頂ヒュッテのバン屋まで行きました。食事をしたり、景色などを楽しんだりしました。24日の夜はクリスマス礼拝を行いました。祝会では司会進行をS2の生徒が担当し、皆でゲームなどをして盛り上がりました。今年も、サンタとトナカイが登場し、プレゼントを皆に配ってくれ、楽しいひと時を過ごすことができました。宿泊したチウーホテルの方にも親切にいただき、皆大満足で西宮に帰ってきました。冬山スキーに関わったすべての方々に感謝いたします。

(冬山スキーディレクター)

<先輩からのメッセージ>

何事も積極的に

宇仁 あさひ
(中高部卒業)

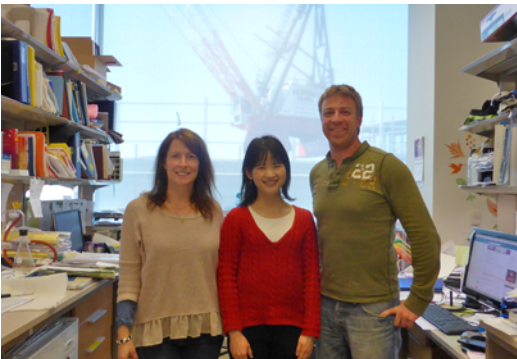
私は中高部卒業後、東京大学理科三類に進学し、この春から医師として働き始めます。

今振り返ってみると、神戸女学院に通わせていただけでよかったと思う点の一つに、英語教育があります。イラストや人形、ゲームなどを取り入れた授業が毎回楽しく、またネイティブの先生方ともっとお話してできるようになりたいという思いで日々楽しく勉強したことを12年経った今でも懐かしく思い出します。

また、交換留学が盛んな点も素晴らしいところだと思います。私はS1の時に一ヶ月間ホストファミリーをさせていただき、夏休みには訪豪旅行にも参加させていただきました。文化を超えて分かり合えることを体験し、世界と自分との距離が縮まりました。当時のホストシスターとは、お互い行き来しあったり一緒に旅行したりと交流は今でも続いています。

そして、私は大学5年時に大学の推薦をいただき、アメリカに研究留学させていただきました。神戸女学院でのこれらの貴重な体験一つ一つがなければ、そもそも応募したいと思ったかどうかかわからないし、研究室はもちろん、日常生活でも全て英語という環境で積極的に会話に参加し、公私共に人脈を広げ、有意義な留学にすることはできなかったらうと感謝しています。

神戸女学院に通う皆さんの周りには、学び、成長する機会が溢れていると思います。その中で、興味のあることには積極的に参加し一生懸命努力して、恵まれた機会をうまく生かし、ぜひ今後の人生の糧にして下さい。



留学先の研究室にて

挑戦は人生のチャンス

津田 祐可子
(中高部卒業)

私は現在、駐日トーゴ共和国大使館で秘書を務めています。大使館が開設されて以来ただ一人の秘書です。しかも日本人は私だけで、同僚は全員アフリカ人という状況で、当初は不安もありました。しかし、文化の力を通して国際平和に尽力したいという希望が強かったため、この仕事に挑戦しました。優しいトーゴ人たちにも助けられて早や4年が経過しました。私の業務は多岐にわたりますが、トーゴの魅力を知ってもらうための活動には特にやりがいを感じます。

私は、S2でオーストラリアに留学しましたが、この経験が現在の私の考え方に大きく影響しているように思います。オーストラリア人の家族と一緒に生活し、様々な国籍の生徒たちと共に学んだ経験は、まさに宝物です。その後、大学で国際政治学を専攻し、国際社会における文化の力に着眼し、大学院ではフランスに留学して日仏間の文化に関わる研究をしました。これまで学んできた語学や異文化への寛容性は、現在の職場で生かされていると思います。

神戸女学院では、興味を持ったことに積極的に挑戦する機会に恵まれていたことに深く感謝しています。部活動、文化祭、体育祭、讚美歌コンクール、留学等、興味を持ったことには何でも思い切って挑戦することで未来の扉は開かれます。また、挑戦する皆さんをサポートして下さる先生方も大勢おられます。大きな可能性を持った皆さん、チャンスを活かして充実した日々を過ごされることを心より願っています。



駐日トーゴ共和国大使館にて臨時代理大使と

第49回中高部長賞 第30回文化・スポーツ賞

今年度中高部長賞表彰式は2014年12月19日(金)の2学期終業日に行われ、JとSの3クラブずつ計6クラブが受賞されました。受賞クラブには表彰状と盾、副賞の5千円が贈呈されました。

文化・スポーツ賞表彰式は2015年1月15日(木)に行われ、受賞者には中高部部長 林先生から表彰状とメダルが贈呈されました。文化・スポーツ賞は、学校代表として各大会等へ参加し、顕著な成績をおさめた団体、個人に授与されるものです。賞の基準は西宮・阪神地区で第1位、兵庫県・近畿・全国で第3位以内とするものであり、選考委員で審議し受賞者をそれぞれ決定しました。

中高部長賞、文化・スポーツ賞は、生徒のクラブ活動や、学校生活での活性化を願い、生徒の努力を称えることが目的であります。来年度もたくさんの受賞者が選出されることを願っています。

施設課の方には講堂のステージを始め、表彰式にふさわしい会場を設営していただきました。有難うございました。

第49回中高部長賞

J 演劇研究部・J ギター部・J テニス部
S 料理研究部・S ブラスバンド部・S バドミントン部

個人情報保護のため、
52ページ目から
53ページ目左段は
一部削除しています。

第30回文化賞 (32名)

☆2014ヨーロッパ女子数学オリンピック (EGMO)
トルコ大会 銀メダル

☆第5回絵本翻訳コンクール 佳作 (第3位)

☆第19回全日本高校・大学生書道展 優秀賞

☆第30回成田山全国読書大会 成田山賞 (第3位相当)

☆日本倫理・哲学グランプリ 銀賞

☆第10回英語スピーチコンテスト 第1位

☆第2回全国高校生英語スピーチコンテスト
第2位

☆第53回全国高等学校生徒英作文コンテスト
2・3年生の部 優良賞

☆ファッションシューズコンテスト高校生部門
最優秀賞 (全国1位相当)

☆第60回青少年読書感想文兵庫県コンクール
毎日新聞社賞 (第3位)

☆第42回高校生英語弁論大会
豊中市長賞 (第1位)

☆第21回高校生英語暗誦大会 第2位

☆第58回阪神 ESS ユニオンスピーチコンテスト
第1位

☆2014阪神 ESS ユニオンシナリオリーディングコ
ンテスト 第1位

☆数学甲子園2014 (第7回全国数学選手権大会)
近畿予選 第3位 (全国大会出場)

☆第53回全国高等学校生徒英作文コンテスト
1年生の部 優秀賞

☆ Show & Tell 近畿高校生プレゼンコンテスト
第3位

☆平成26年度中学生の「税についての作文」
西宮宝塚租税教育推進協議会賞

☆第19回ディベート甲子園近畿・北陸地区予選
第3位（全国大会出場）

☆第49回近畿中学校女子英語暗唱大会 第3位

☆第1回クラーク杯近畿中学生英語スピーチコンテ
スト 第1位

☆税の書道 西宮納税貯蓄組合連合会会長賞

☆第47回私学の書展 特選呉竹賞

☆第9回全日本小学生・中学生書道誌上展
ベスト100

第30回スポーツ賞（11名）

☆平成25年度西宮市民テニス大会（中学生の部）
シングルス第1位

☆第11回兵庫県中学校秋季テニス大会学校対抗の部
第3位

（中高部教諭）

2015年度中学部入試結果報告

日程：2015年1月17日（土）・19日（月）

募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	手続完了者数
135	223	218	157	144

2015年度中高部転入学試験について

日程：2015年1月27日（火）

	志願者数	受験者数	合格者数
転入学	1	1	0

（中高部事務室）



<課外活動紹介>

[クラブ] Jバドミントン部

部長

私たちJバドミントン部は、年に数回行われる公式戦に向けて、週5日練習しています。Sの先輩に教わる機会も多く、毎日のクラブ活動がとても楽しいです。夏休みにある2回の合宿では、充実した練習ができ、また部員の仲もより一層深まります。

3月に行われるダブルス大会、そして春の公式戦で良い結果を残せるようこれからも頑張りますので、応援よろしくをお願いします！

[クラブ] Jコンピューター部

部長

Jコンピューター部は、月・火・木の週3回、新しい設備が導入されたITセンターで活動しています。文化祭ではプログラミングしたゲームの発表を、オープンキャンパスでは神戸女学院の風景と来場者を合成したポストカードの作成を行いました。今年度からはタイピング技術向上のため「毎日パソコン入力コンクール」にも参加しています。最初は全くの初心者でも、活動を重ねるうちにスキルアップしていきます。自分たちで試行錯誤を繰り返し、仲間と技術を高め合いながら楽しく活動しています。



[クラブ]

S軽音楽部

高等学部 2年生

私達は年に4～5回行われるライブに向けて日々練習しています。

ロックやポップスの曲を曲ごとに異なるメンバーで演奏し、学年関係なく、楽しく練習を重ねています。単なる個人の楽器の練習ではなく、みんなで1つの音楽を、そして1つのライブを作り上げることの楽しさを実感しつつ本番の成功を目指しています。

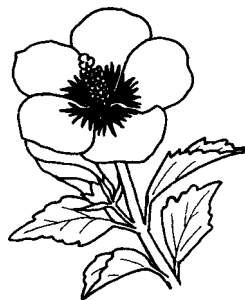
現J3の新入部員を含めた3学年で今後のライブでもより良いものを作ることができるように頑張ります！

[クラブ]

S書道部

部長

S書道部は毎週火曜日と金曜日に書道室で活動しています。顧問の小島先生にご指導をいただきながら、大会に向けてコツコツ練習をしています。また、文化祭では作品の展示の他、書道パフォーマンスを行いました。よりよいものしていくために学年を越えて部員全員で話し合い、何度も練習を重ねた結果、有志・クラブ最優秀賞をいただくことができました。これからも皆と協力しあい、切磋琢磨して、充実したクラブ活動を続けていきたいと思えます。



〈学院日誌〉

1月8日(木)	中高部始業日	2月18日(水)	中高部教員会議
1月14日(水)	中高部教員会議	2月25日(水)	理事会
1月16日(金)	教授会	3月2日(月)	高等学部卒業式
1月17日(土)・18日(日)	大学入試センター試験	3月4日(水)	中高部教員会議
1月17日(土)・19日(月)	中学部入学試験	3月6日(金)	教授会
1月28日(水)	理事会 中高部教員会議	3月7日(土)	文学部・人間科学部一般入学試験 (後期日程)
1月29日(木)	文学部・人間科学部一般入学試験 (前期A日程)	3月19日(木)	大学卒業式、大学院修士学位記授 与式 中高部教員会議
1月29日(木)~31日(土)	音楽学部一般入学試験(前期A日 程)	3月20日(金)	中学部卒業式、中高部終業式
1月30日(金)	文学部・人間科学部一般入学試験 (前期B日程)	3月21日(土・祝)	オープンキャンパス
2月4日(水)	中高部教員会議	3月25日(水)	理事会 臨時評議員会 臨時理事会
2月13日(金)	教授会		
2月17日(火)	文学部・人間科学部一般入学試験 (前期C・D日程)		

目

震災から20年……………	1
クリスマス報告……………	3
KCC だより……………	5
2015年度年間標語……………	8
退職のことば……………	8
人事・慶弔……………	13
史料室の窓・高等教育130年……………	14
オフィスの宝物……………	15
新刊紹介……………	16
その他の新刊一覧……………	16
大学報告	
仕事発見セミナー～学生が学内で企業と出会う場を創出～…	17
セントジョセフ・カレッジ(インド)と大学間協定を締結…	17
2014年度音楽学部定期演奏会報告……………	18
第39回神戸女学院大学英語英文学会(KCSSES)大会報告…	19
学生寮音楽学部生有志によるチャリティーコンサート…	19
舞踊専攻第5回卒業公演……………	20
2014年度文学部卒業論文題名……………	20
2014年度音楽学部卒業演奏会演奏曲目……………	32
2014年度人間科学部卒業論文題名……………	34
2014年度文学研究科博士論文題名……………	39
2014年度文学研究科修士論文題名……………	39
2014年度音楽研究科修士公開試験曲目……………	39

次

2014年度人間科学研究科博士前期課程・修士論文題名…	40
先輩からのメッセージ……………	40
2015年度大学入試結果(中間2/24現在)報告と概要…	41
2015年度夏期語学研修参加者募集……………	41
受入れ留学生報告……………	42
研究所活動報告……………	43
女性学インスティテュート活動報告……………	45
私の研究……………	46
ゼミ紹介……………	47
課外活動紹介……………	48
中高部報告	
ファッションシューズコンテスト2015 受賞報告…	49
英文誌「 <i>Journal of Chemical Education</i> 」に 報告された内容を取り入れた化学実験授業実践…	49
冬の修養会「釜ヶ崎訪問」に参加して……………	50
2014年度中高部冬山スキー……………	50
先輩からのメッセージ……………	51
第49回中高部長賞、第30回文化・スポーツ賞…	52
2015年度中学部入試結果報告……………	53
2015年度中高部転入学試験について……………	53
課外活動紹介……………	54
学院日誌……………	56